

脂質・糖の代謝 全身で維持

東北大教授ら「動脈硬化の解明に」

体内での糖やコレステロールの分解、合成などの代謝機能維持に、血管や骨髄など複数の臓器・組織が連携しあっていること

とが、東北大の下川宏明教授（循環器内科）らの研究で分かった。米医学雑誌「サイキュレーション・リサーチ」オンライン版に22日、掲載された。

血管内側の内皮細胞には動脈硬化の進行を防ぐ働きがある。遺伝子操作で内皮細胞の働きを悪くして動脈硬化が自然に起こるようにしたマウスに、正常なマウスの骨髄を移植したところ、内皮細胞の働きが回復し、高コレステロール血症や糖尿病などの症状も改善した。骨髄中の脂肪細胞か

ら作り出されるたんぱく質「アディポネクチン」や、特殊な酵素が体内で増えたため、内皮細胞が修復されていたとみられる。

この実験結果を受け、血管や骨髄、脂肪細胞も含めた体全体のネットワークにより体の機能が調節されていると指摘する。下川教授は「アディポネクチンを増やすには適度な運動など生活習慣の見直しが重要だ。動脈硬化のさらなる解明や新薬開発につなげたい」と話している。

2012年(平成24年)6月23日(土)
読売新聞朝刊

※転載許可取得済